



2026 年 9 月 25 日

報道関係者各位

公益社団法人京都保健会

京都民医連中央病院の医療 DX 計画が厚生労働省支援事業に採択

ウェアラブル機器によるバイタル情報の活用を起点に、患者安全と医療の質向上を推進

公益社団法人京都保健会（所在地：京都府京都市右京区、理事長 松原 爲人、以下：京都保健会）が運営する京都民医連中央病院は、このたび、厚生労働省が実施する「医療分野における業務効率化・職場環境改善支援事業」において、医療 DX に関する取り組みが採択内示されましたので、お知らせいたします。

本事業では、ウェアラブル型の測定機器等を活用し、血圧や脈拍など、患者さんの状態を把握するために必要な情報の取得、記録、共有をデジタル化します。

測定されたデータを電子的に取り込み、電子カルテ等の診療情報と連携させることで、医療従事者による転記や確認作業の負担を軽減するとともに、患者さんの状態変化をより迅速かつ確実に把握できる環境の整備を進めます。

■患者さんの状態変化を早期に捉える仕組みを構築

医療現場では、血圧、脈拍、呼吸、体温、意識状態など、さまざまな情報を組み合わせながら患者さんの状態を判断しています。

京都民医連中央病院では、医療従事者が確認・入力する情報を組み合わせ、患者さんの状態悪化の兆候を早期に把握するための指標である「早期警戒スコア（NEWS）」等を活用する仕組みを構築しています。今回、ウェアラブル機器等から取得する情報を含め、より早期に状態悪化の兆候を把握することを試みることにしています。

データの取得から記録、評価、医療従事者への通知、対応内容の記録、事後の振り返りまでを一連の業務として整備することで、確認の遅れや情報の見落としを防ぎ、必要な対応へ速やかにつなげることを目指します。

■コマンドセンターと AI を活用した医療提供体制へ

京都保健会では、今回の取り組みを、法人全体で進める医療 DX の先行的な実装の一つと位置付けています。今後は、京都保健会が整備を進めるコマンドセンターとの段階的な連携も視野に入れています。

医療におけるコマンドセンターとは、患者さんの状態、病床の利用状況、入退院や院内移動、診療・看護業務など、院内の各部門に分散している情報を集約・可視化し、組織横断的な状況把握と意思決定を支援する仕組みです。

必要な情報を一か所に集約することで、個々の職員の経験や注意力だけに依存することなく、病院全体で患者さんの状態や業務の状況を把握し、優先的に対応すべき事象を早期に共有できる環境を目指します。

さらに、蓄積されたデータの分析には AI を活用し、患者さんの状態変化の兆候や、医療従事者が優先して確認すべき情報を抽出・提示する仕組みの構築を進めます。

AI は、医療従事者に代わって診断や治療方針を決定するものではありません。異常の可能性がある情報や確認の優先度を提示し、医師や看護師などの専門職による判断を支援する役割として活用します。最終的な確認と診療上の判断は、これまでと同様に医療従事者が行います。

なお、コマンドセンターおよび AI に関する取り組みは、そのすべてが今回の補助事業の対象となるものではなく、京都保健会が別途進める中長期的な医療 DX 施策として、今回の事業との連携を図るものです。

■本事業で目指すこと

本事業では、主に次の実現を目指します。

- ✓ 患者さんの状態変化を早期に把握し、迅速な対応につなげること
- ✓ 測定値の転記や重複入力を減らし、記録の正確性を高めること
- ✓ 確認の遅れや重要な情報の見落としを防止すること
- ✓ 医師、看護師をはじめとする多職種間の情報共有を円滑にすること
- ✓ 職員の業務負担を軽減し、患者さんへの観察、説明、ケアに充てる時間を増やすこと
- ✓ データを継続的に活用し、医療の質と業務プロセスの改善につなげること

■患者安全を最優先とした段階的な導入

新しい技術の導入にあたっては、患者安全を最優先とし、情報セキュリティ、データの正確性、個人情報保護、職員教育、障害発生時の対応手順などを含めた運用体制を整備します。

導入後も、医療従事者による確認を前提として、データの精度や通知の適切性、現場業務への影響を継続的に検証します。安全性と有効性を確認しながら段階的に対象を拡大し、問題が認められた場合には運用を見直す体制を構築します。

■京都保健会の考え方

医療 DX の目的は、技術や機器を導入することそのものではありません。

デジタル技術によって医療従事者を支援し、患者さんの小さな変化に早く気づき、より迅速で適切な医療やケアにつなげることが重要であると考えています。

京都保健会は、病院、診療所、訪問看護、介護などの各事業を通じて、地域の皆さまのいのちと健康を支えてきました。今後も、現場の知見とデジタル技術を組み合わせ、患者さんにとって安全で質の高い医療を持続的に提供できる仕組みづくりに取り組んでまいります。

＜公益社団法人京都保健会 理事長：松原 為人＞

今回の採択は、京都民医連中央病院における患者安全と医療の質向上をさらに前進させる重要な一歩です。ウェアラブル機器によるバイタル情報の活用を着実に進めるとともに、AI やコマンドセンターも段階的に活用し、患者さんの状態変化を早期に捉え、医療従事者がより患者さんに向き合える環境を整えてまいります。今後も、現場の知見とデジタル技術を結び付け、地域の皆さまに安全で質の高い医療・介護を提供してまいります。



■京都保健会について

公益社団法人京都保健会は、1956 年 3 月 20 日に設立し、府内広域に 3 病院 11 診療所（歯科併設 2）他に訪問看護ステーション・ヘルパーステーション等の介護施設、看護専門学校を含め 38 事業所を開設・運営しています。京都保健会は、無差別・平等の医療と介護・福祉の実現をめざし「ケアの倫理」の視点に立ち、人権と非営利の共同と連帯を広げ、最も困っている人々のよりどころとしての存在意義を輝かせ、安心して住み続けられるまちづくりの輪を広げています。

<https://kyoto-hokenkai.or.jp/>

【本プレスリリースに関する報道関係者の方々のお問い合わせ】

公益社団法人京都保健会 IT 企画推進部 下川忠弘

Email : shimogawa_tadahiro@kyoto-hokenkai.jp

お問い合わせフォーム : <https://kyoto-hokenkai.or.jp/mail-form.htm>